

外来がん患者の副作用情報を病院と共有 アシストの専門連携薬局、PHR活用し実証事業

2025/1/8 12:14



あやめ薬局下志津店

薬局18店舗を運営するアシスト（千葉県佐倉市）の専門医療機関連携薬局、あやめ薬局下志津店（同市）は東邦大医療センター佐倉病院（同）などと共同で、外来がん患者のPHR（パーソナル・ヘルス・レコード、個人健康記録）を活用した薬薬連携の実証事業に取り組んでいる。がん患者から得た副作用などの情報を薬局と病院が共有することで、PHRを使った地域健康情報システムの有用性を検証する狙い。

実証事業では、PHRの一つである「ヘル

スケアパスポート」を用い、患者の有害事象のモニタリングを実施。2024年1月から開始した第1弾では同病院の外来化学療法室で点滴治療を行った患者が対象（実証期間は25年3月31日まで）で、約50人まで増加した。24年12月からは、内服の抗がん薬の服用患者に対象を変更した第2弾を開始した。



東邦大医療センター佐倉病院

患者には各自の携帯電話にアプリを入れ、プロフィールなどを登録してもらう。薬局・病院間の「施設間連絡メモ」を設定した上で、副作用のグレードなどを入力。副作用は「吐き気」「下痢」など計12項目。CTCAE（有害事象共通用語基準）のグレードで入れられるようになっており、患者はグレード0～3の4段階の中から選ぶ。

●患者の入力内容は毎日確認



ヘルスケアパスポートの一画面

患者の入力内容は、同薬局に勤務する日本臨床腫瘍薬学会の外来がん治療専門薬剤師2人と、日本医療薬学会の地域薬学ケア専門薬剤師（がん、暫定）1人が毎日確認。あらかじめ決めた基準に沿い、患者に服薬フォローの電話を入れる。初発時のフォローの基準は、対処方法（支持療法薬）のある副作用の場合はグレード1以上、対処方法のない副作用の場合はグレード2以上と定めている。

施設間連絡メモはチャット形式で、患者は見るできない。同メモに報告を入れる事項の基準は嘔気、嘔吐、下痢、発疹、かゆみがグレード2以上、呼吸困難が全グレード、その他

の副作用がグレード3で、このほか、発熱38度以上や高血圧グレードが3以上の時も報告を入れる。薬局からは患者が話した内容や処方提案、病院からは計測した患者の検査値なども伝える。

●投与量を減らし、治療を完遂

過去には抗がん剤の副作用であるしびれを訴えていた患者に関して、病院側と相談の上、点滴の抗がん剤の投与量を1段階減らし、治療を完遂できたこともある。同社の教育・研修課長で実証事業にも携わる横山晴子氏は「最終クールではあったが、1段階減量して治療を完遂できたのは良かった」と今回の実証事業の手応えを感じている。

第2弾では、投与初期に高頻度に発現する副作用とブルーレター（安全性速報）が出ている間質性肺疾患のマネジメントのため、まずは乳がんを適応とする「ベージニオ」（一般名＝アベマシクリブ）1品目に絞って行う。（星光洋）